

# 唐古・鍵遺跡

日本を代表する史跡である  
「唐古・鍵遺跡」。

この地から、弥生時代の遺構や  
遺物が数多く発見され、

弥生人の生活が  
明らかにされてきた。

特に、楼閣が描かれた土器片の発見は、  
考古学界に大きな驚きを持って迎えられ、  
邪馬台国論争に一石を投じた。

二千年の時を超えて届いた  
古代からの贈り物を大切に守り、  
未来へと伝えていくために、

「唐古・鍵遺跡」のあゆみとその意義を  
振り返ってみた。



## 「楼閣」が描かれた土器片

唐古・鍵遺跡のシンボルである「復元楼閣」の元となった絵画土器です。壺の胴部に2層以上の構造をもつ建物が描かれていました。屋根の大棟や軒先には、特徴的な渦巻き飾りが描かれています。下層の屋根の上には、横向きの逆S字形の線刻があり、屋根にとまる鳥を表現しています。渦巻きの飾りや鳥が描かれていることから、宗教的な特別な建物だったと推定されています。

この絵画土器の発見は、中国大陆との交渉、また紀元前1世紀の大和に高層建築があったということと弥生時代のイメージを大きく変えるとともに、「邪馬台国」所在地論争にも及びました。



「楼閣」が描かれた土器片(町指定文化財)

## 遺跡調査のあゆみ

### 遺跡の発見と唐古池の調査

本遺跡が考古学界に報告されたのは明治34年(1901)に遡ります。その後、昭和4年(1929)に地元飯田松治郎・恒男親子が採集品の図録を自費出版し、さらに、在野の考古学者森本六爾らも小規模な発掘調査を行っています。

昭和11年(1936)、唐古池の土をとって檀原神宮への道(現在の国道24号)を整備することになり、並行して発掘調査を行うことになりました。奈良県と京都帝国大学による共同調査で、末永雅雄博士が指揮をとりました。



第1次調査



末永雅雄博士

この調査では、多数の弥生土器と木製農耕具が出土し、弥生時代が農耕社会であることを立証しました。また、調査の6年後に刊行された報告書は弥生時代研究の基礎となりました。

### 調査の再開

戦後しばらくは調査の空白期が続きましたが、昭和52年(1977)に北幼稚園の園舎建築に伴い、第3次調査が行われました。調査では、集落を囲む南側の環濠を鍵地区で検出したことから、遺跡名が「唐古遺跡」から「唐古・鍵遺跡」へと改められました。また、銅鐸鑄型など数多くの貴重な遺物が出土したことから、遺跡の範囲を確かめるための調査が始まりました。なお、第12次調査までは奈良県立檀原考古学研究所が、昭和57年(1982)の第13次調査以降は田原本町が引き継ぎ、調査を継続しました。



第5次調査で出土した土器



大型建物跡

### 明らかとなる遺跡の内容

毎年3〜4カ所で範囲確認調査や水路改修等の農業基盤整備に伴う調査などを実施し、徐々に遺跡の範囲と構造が明らかになりました。遺跡面積42万平方メートルもある日本最大級の「多重環濠集落」であることが判明しました。また、鞘入り石剣、吉備産の大壺、前期の木棺墓と大陸系の人骨、布きれなどの例のない遺物の出土は、この遺跡の重要性を認識させることになりました。

そして、平成4年(1992)に「楼閣を描いた土器片」の出土が大きく報じられたことや遺跡に「復元楼閣」を建築

したことで史跡指定の機運が高まりました。また、指定に前後して遺跡の内容確認調査が行われ、銅鐸鑄造関連の炉跡、2棟の大型建物、弥生時代最大級・最上級のヒスイ勾玉が入った褐鉄鉦容器などが発見され、近畿地方を代表する環濠集落として認識されるに至りました。

平成11年(1999)に遺跡の中心部約10ヘクタールが史跡指定を受け、公園へと整備されることになったのです。



勾玉(大・小)



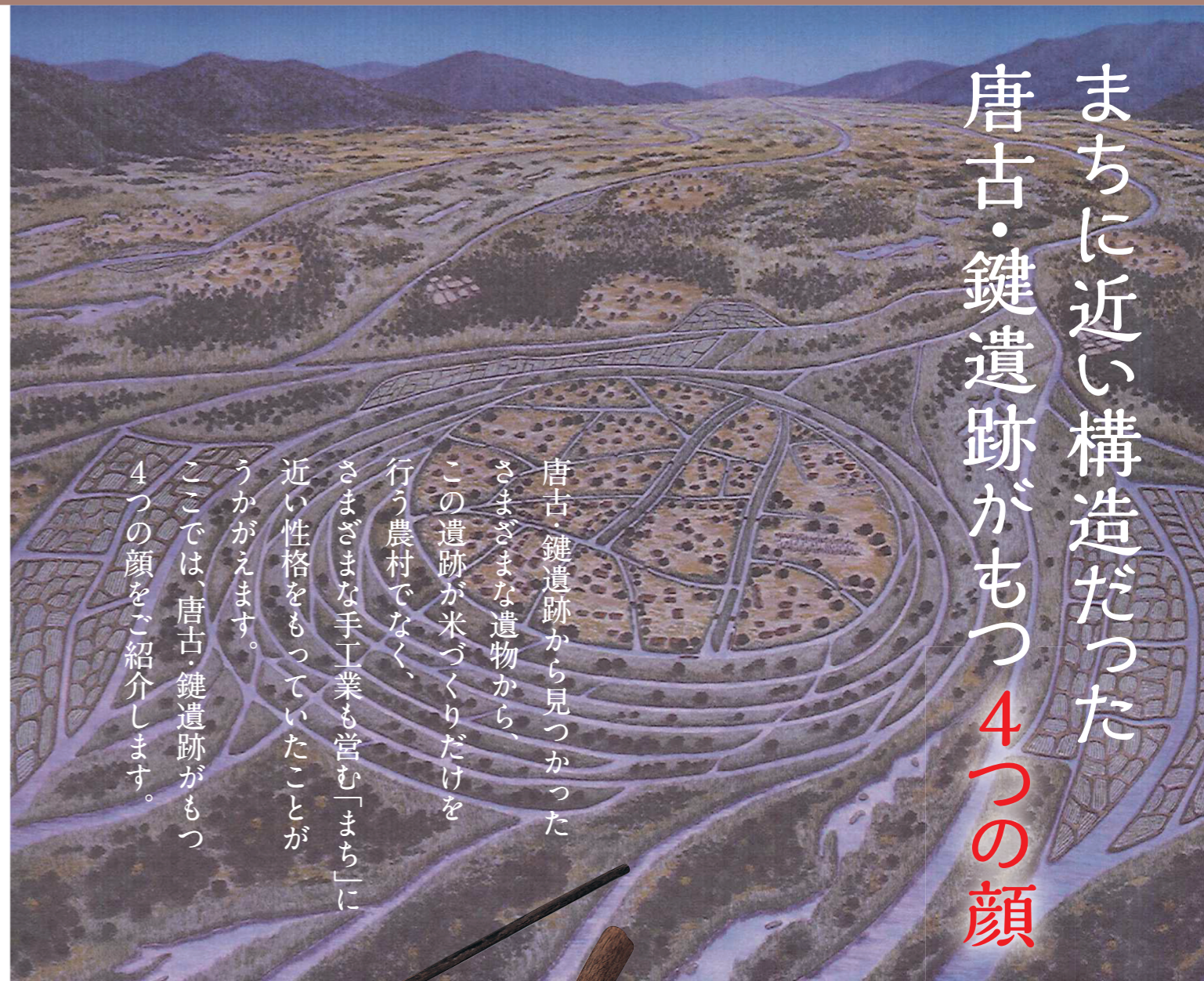
翡翠(ひすい)製勾玉と鳴石容器(蓋付)(町指定文化財)

### 未来へ受け継ぐ唐古・鍵遺跡

こうして史跡公園としての整備が進み、市民の憩いと学習の場として活用されることになった唐古・鍵遺跡ですが、これまで発掘調査されたのは遺跡面積のうち1割にとどまります。これからも新たな発見が期待される遺跡なのです。

そして、二千年前の人々が残した貴重な文化遺産を未来へと伝えていく必要があります。

# まちに近い構造だった 唐古・鍵遺跡がもつ4つの顔



都市構造の想定図

唐古・鍵遺跡から見つかったさまざまな遺物から、この遺跡が米づくりだけを行う農村でなく、さまざまな手工業も営む「まち」に近い性格をもっていたことがうかがえます。ここでは、唐古・鍵遺跡がもつ4つの顔をご紹介します。

## 第1の顔 農耕のムラ

唐古・鍵遺跡は、日本でも最大級の規模を誇る環濠集落で、最盛期には600人以上の人々が住んでいたと推定されています。この人たちが一年を通して生活できたのは、主食とするお米が確保できたからでしょう。それを示すように唐古・鍵遺跡からは多量の炭化したお米が出土しています。また、そのお米を作るためのさまざまな農具も見つかっています。水田を耕起するための木製の鋤や鋤、稲の穂を刈り取る石庖丁、お米を脱穀するための大臼や竪杵などで、これら農具類は集落内から多量に見つかっています。ただし、水田は集落の周囲1〜2キロメートル離れた場所に点在していたようですが、残念ながらその痕跡は見つかっていません。



結束された稲穂と炭化した米・粃

木で作られた農具類

## 第4の顔 弥生のハイテク技術

唐古・鍵ムラでは木や石、骨を加工し、さまざまな道具、生活必需品が生産されています。それら手工業のうち、特に専門性が高かったのが青銅器の製造です。ムラの東南部（北幼稚園の北辺り）に青銅器の工房がありました。火を使うことから、ムラの風下に配置されたようです。この工房では、少数の石製鑄型と多数の土製鑄型が出土しており、石製から土製への技術革新が行われたことがわかっています。弥生時代最も格式の高い祭器である銅鐸のほか、銅剣や銅釧（腕輪）、銅鏃などを鑄造していました。紀元1世紀頃の青銅器生産としては、近畿地方最大規模を誇るもので、唐古・鍵ムラの強大な力が見えてきます。



銅鐸をつくる様子

土製の銅鐸鑄型外枠

## 第3の顔 物流センター

唐古・鍵ムラの人たちは、北部九州から中部地方の人々と交流をしていました。それを示す遺物に、唐古・鍵ムラに運ばれてきた土器があります。西は、河内（大阪府・摂津（兵庫県）や吉備（岡山県）、さらには筑紫（福岡県）の土器が出土しており、大和川、そして瀬戸内海を介してつながっていました。東は伊勢湾岸（三重・愛知県）・近江（滋賀県）・信濃地域や天竜川流域（長野県）の土器があり、陸路などを通じて交流がありました。土器以外にも、新潟県姫川のヒスイや京都府の水晶などの貴重な玉類、タイヤサバ、アカニシ、ウニなどの海産物も出土しています。このように唐古・鍵ムラは物資流通の拠点となり、富が蓄積されていったのでしょう。



弥生時代の市の様子

吉備器台

吉備大壺

## 第2の顔 環濠をめぐるムラ

環濠集落である唐古・鍵ムラは、直径400メートルの範囲が居住域で、その周囲の幅200メートル前後に多重の環濠を巡らせていました。最も内側にある「大環濠」は、幅は7メートル前後、深さ1・5〜2メートルもある大規模なものです。大環濠の総延長は1・5キロメートルに及ぶもので、相当な労働力を必要とすることから強大な力をもっていたのでしょう。

この唐古・鍵ムラの環濠の役割については3つの機能が推定されます。1つは、戦いに備えて敵からムラを守るためのもです。2つ目はムラの立地が低地であるため、集落内部の水を排水する必要があったのです。3つ目は「運河」の役割です。環濠は河川に連結していることから船を利用した物資流通に使われたと推定されます。

江戸時代までは、大阪湾から大和川を遡る川船が奈良盆地への物資流通に利用されていました。唐古・鍵ムラの環濠も物資流通に大きな役割を果たしていたと考えられます。



環濠のイメージ

大環濠